

第2章 京都大学本部構内A T29区の発掘調査

泉 拓良 飛野博文

1 調査の経過

本調査区は吉田山の西麓，京都大学本部構内の東南隅に位置している(図版1-124)。昭和54年に工学部機械系校舎の新営計画にもとづいて，新営予定地とその周辺に7ヶ所の試掘坑を設け，遺構と層序の確認をおこなった[岡田ほか80 pp.39-40]。その結果，鎌倉時代ごろの溝・土坑や縄文晩期・弥生前期の遺物包含層が明らかになり，また，周辺での発掘調査では，A T27区で奈良時代の堅穴住居跡2棟と中世の木棺墓などを検出しており(図版1-75)，A X28区では鎌倉時代の建物や井戸，近世の白川道とその側溝などを検出している(図版1-57・90)。以上のような知見を踏まえ，今回の建物の敷地となる当初計画の西半部分の全域を発掘調査することにした。

2 層 位

調査区は旧白川水系によって形成された扇状地上に位置し，現地表面は東北隅で標高約59m，西南隅で約58mをはかる。層序は基本的の上から表土，灰黒色土，赤褐色土，暗褐色土，黄色砂，白色粗砂の順であった(図4)。白色粗砂の下位には砂と粘土が2mの厚さにわたって互層をなし，その下に淡褐色の粘土が標高54.2mから1m以上の厚さで堆積している。灰黒色土(第2層)は小礫の混じる近世の畑作土。暗褐色土(第4層)は黄砂が混じり，13世紀の遺物をおもに包含する。黄色砂(第5層)は北白川に通有の鍵層で弥生前期末～中期初頭の堆積であるが，人頭大の花崗岩を多く含む土石流状の堆積を示していた。白色粗砂(第6層)以下は無遺物で，弥生前期以前の包含層はより東に限られると推定される。

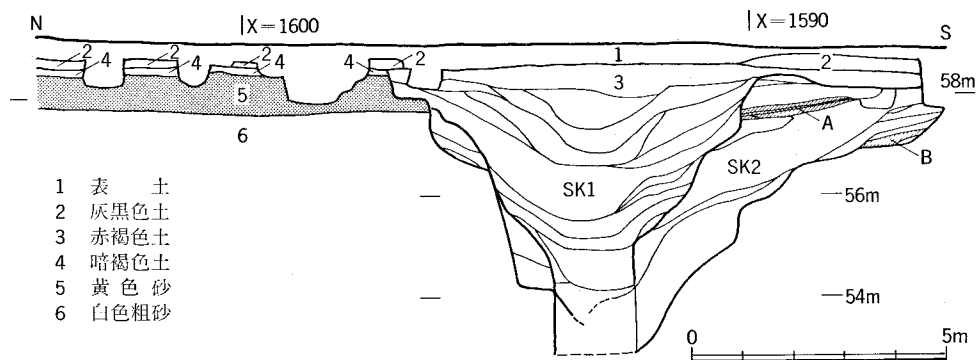


図4 調査区東壁の層位 縮尺1/150

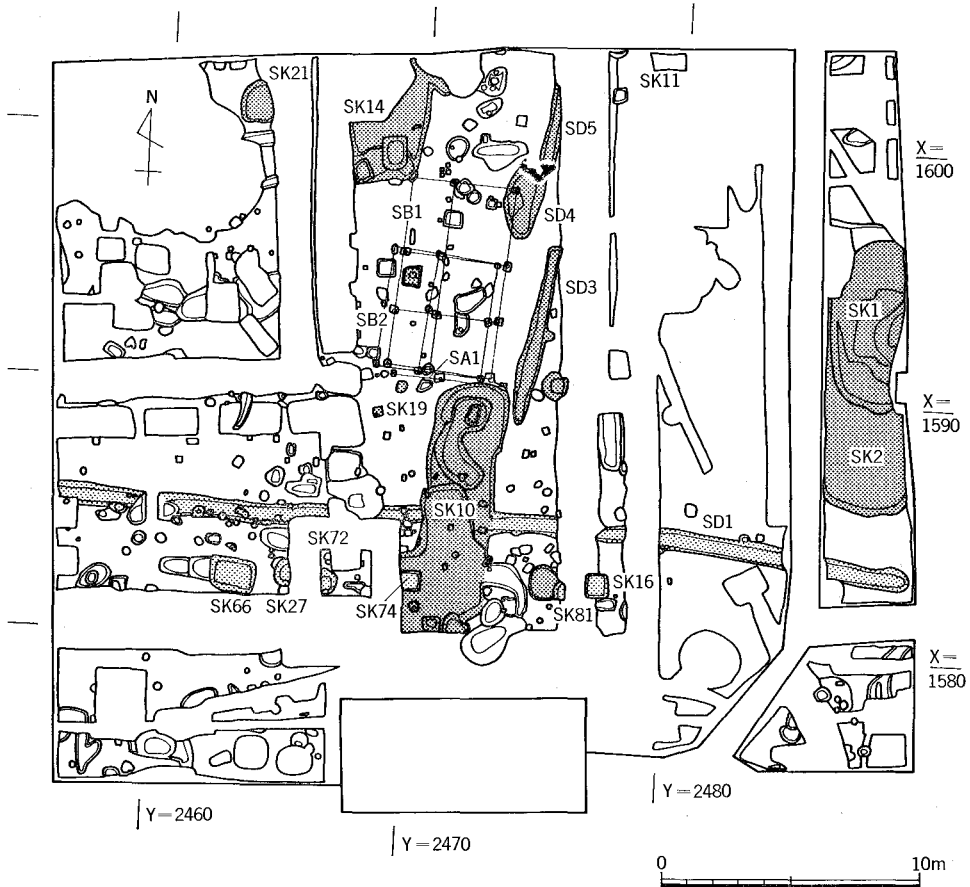


図5 検出遺構縮尺1/300

3 遺構と遺物

検出した遺構は、暗褐色土上面で検出した近世の柵列を除き、他はすべて中世の遺構であった。遺構の埋土と方位などから3期に細分することが可能であり、以下では各時期にわけて記述する。出土遺物は整理箱に19箱で、うち18箱は中世の遺物であり、他は近世陶磁器、縄文土器と弥生土器の細片、石鏃・石斧各1点であった。ここではこのうち遺構から出土した土器類を中心に、各遺構ごとに略述する。

第1期 溝SD1とその南に並列する方形土坑とからなる(図5)。遺構の埋土は黒褐色を呈し、遺構方位はSD1の東半以外は真東西方位を示す。

溝 SD1は幅0.8m、深さ0.3mの断面梯形の浅い溝。調査区東端で立ち上がり、検出長は33mである(図版2-1)。溝底および肩部には一辺0.3mの方形掘形柱穴列がある

遺構と遺物

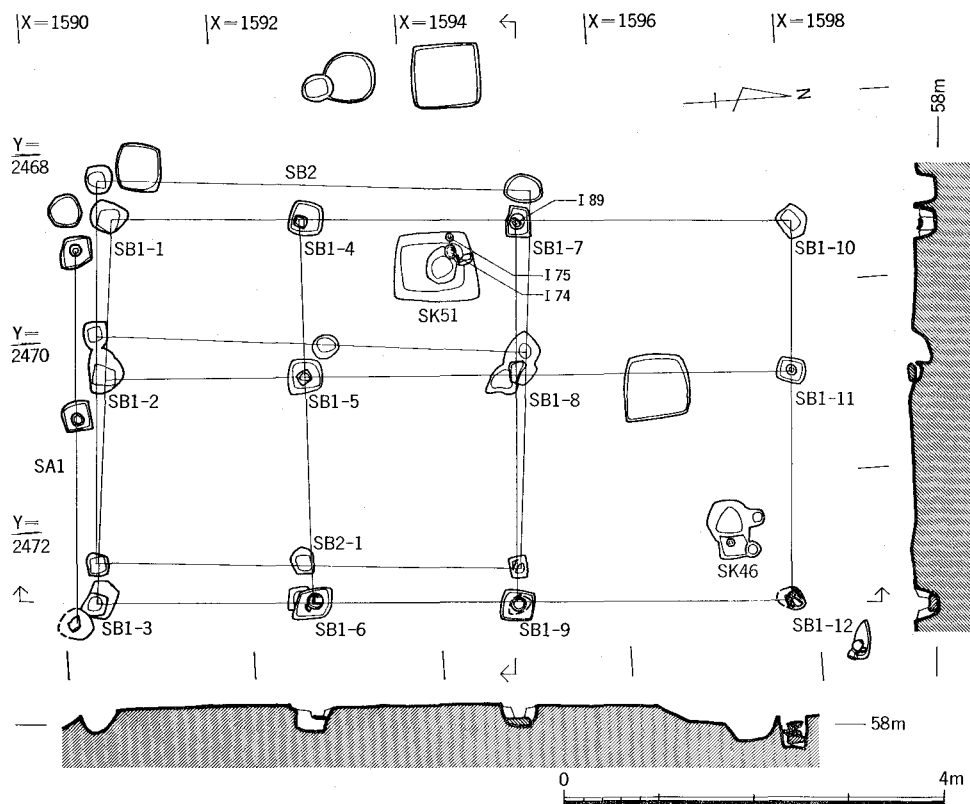


図6 建物SB1・SB2 縮尺1/80

が、等間隔には並ばない。遺物は12世紀中・後葉ごろである(I 76～I 81)。

方形土坑 SK66は1.3m×1.8mの長方形を呈し、深さは0.3m。SK16, SK27, SK72, SK74, SK81は一辺0.8～1.1mの方形を呈し、深さは0.6mほどの相似した土坑である。SK16では底に近い所から水平に置かれた北宋銭「祥符元寶」(1008年初鑄)が出土したほか、12世紀中葉ごろの土師器皿が出土した(I 68～I 70)。これらの方形土坑は墓墳とも推定できる。

第2期 調査区の中央と東半で検出した建物、溝、土坑、濠状遺構などからなる。遺構の埋土は、黒褐色土に近いSK14を除き、暗褐色を呈する。遺構の方位は5°～10°東に偏する(図5)。SD1を切るSK10の存在から第1期よりも新しい。

建物 SB1とSB2の2棟を検出した(図版2-2, 図6)。SB1は南北4間の総柱建物で、東西は2間またはそれ以上になり、柱間は一定しない。柱穴には礎盤として平瓦をもつもの(SB1-6)や石をもつもの(SB1-9)がある。また、柱穴SB1-7で

は柱あたりに完形の土師器皿(I 89)を埋納してあった。S B 1内では完形の土師器皿2点(I 74)と土師器蓋1点(I 75)を埋納した深さ0.3mの土坑S K51や、完形の土師器皿1点とほぼ完形の土師器皿2点(I 71~I 73)が出土した深さ0.2mのS K46を検出した。

S B 2はS B 1の南半と重なる位置にある2間×2間以上の建物で、S B 1の建替えとも推測できる。S B 2-1からは青白磁の水滴が出土した(I 94)。両側縁に型押し陽刻で草花文を施し、頂部凸帯の両側縁にも珠文を配す。斜線で示した部分を研磨し、破損後も使用した。この建物群の南には柵S A 1があり、建物西辺柱節の南延長約2mの所には、猪の頭骨1頭分を納めた方形の土坑S K19がある。これらの遺構群の年代は、S B 1とS K51とS K46出土土師器皿からみて中世京都I期中段階すなわち13世紀中葉ごろである。ただしI 75の土師器蓋は白河北殿S E26に類例があり[宇野81 p35]、12世紀に遡る。

溝 建物の東側にあるS D 3~S D 5で、建物と方位を同じくする。S D 3・S D 5は幅0.6m、深さ0.3m、S D 4は幅1.2m、深さ0.2mと浅い溝である。S D 3からはS K10と同じ多彩釉陶器(I 65)のほか瓦器碗・土師器皿など13世紀を下限とする遺物が出土し(I 82~I 87)、S D 4からもほぼ同時期の土器類が出土した(I 90~I 92)。

土 坑 建物の北東にある溝状の土坑S K14と、建物の南にある皿状の土坑S K10とがある。S K14は北と西とに攪乱を受けた検出長が東西2m、南北4mのL字形溝状土坑である(図版4-1)。深さは1.2mと深く、底にはヘドロ状の沈殿物が2~5cmの厚さで堆積していた。埋土の中位に2ヶ所に固まって瓦器鍋・羽釜が出土した。鍋は5個体で、口径22cm(I 10~I 12)と、29cm(I 13・I 14)の大小2種にわかれ、口縁部の形態も前者は後者より屈曲がきつく、両者の違いが明確である。羽釜類も口径25cmのもの(I 15)と、三足の付く口径15cmのもの(I 16)とにわかれる。これにともなう土師器皿類(I 1~I 6)、瓦器碗(I 9)は中世京都I期古~中段階に属し、土師器高杯(I 7)や灰釉系陶器壺(I 8)もこの時期を下らない(図版5)。したがって遺構の埋没した時期は13世紀前~中葉である。

S K10は2.5m×10m、深さ0.3mの不定形を呈する皿状土坑である。ここからは雁股式鉄鏃(I 95)と斧箭式鉄鏃(I 96)が各1点のほか、240点の瓦片と、約90点の鉄釘片が出土し、建築廃材の捨て場の様相を示す。出土した土器類(I 55~I 64、I 66・I 67)は細片でかつ少量であるが、13世紀中葉ごろと思われる。I 63、I 64、I 66は多彩釉陶器の壺で鉄釉とベンガラ?で幾何学文を描いた後に、外面全面に淡緑色釉を薄く施釉している。素地は中国南方産のものに類似するがより精良であり、他に類例を知らない。

濠状遺構 調査区東端のS K 1とS K 2とからなる。S K 1は南北7m、深さ5.6m

遺構と遺物

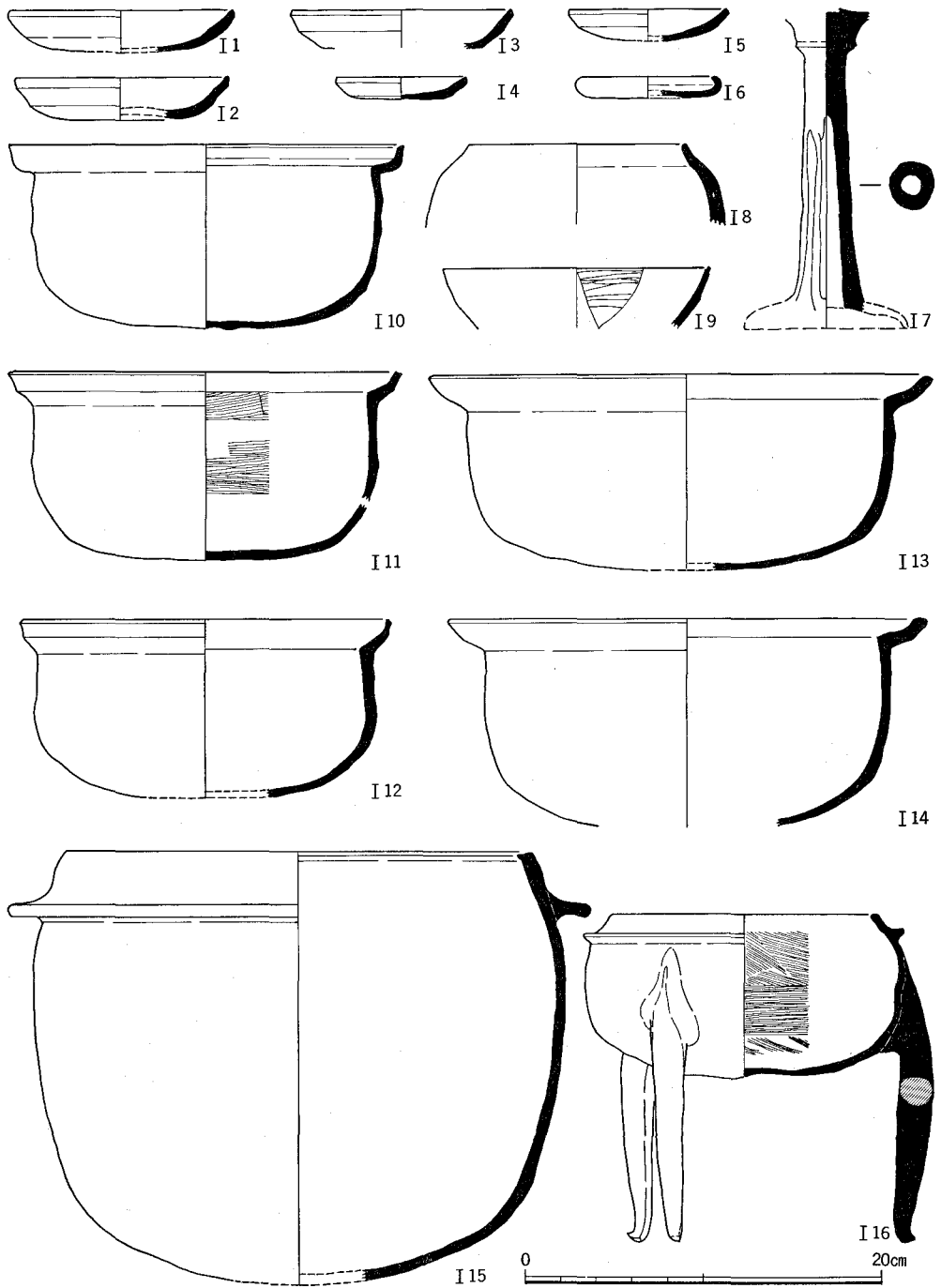


図7 SK14出土遺物(I1～I7土師器, I8灰釉系陶器, I9～I16瓦器)

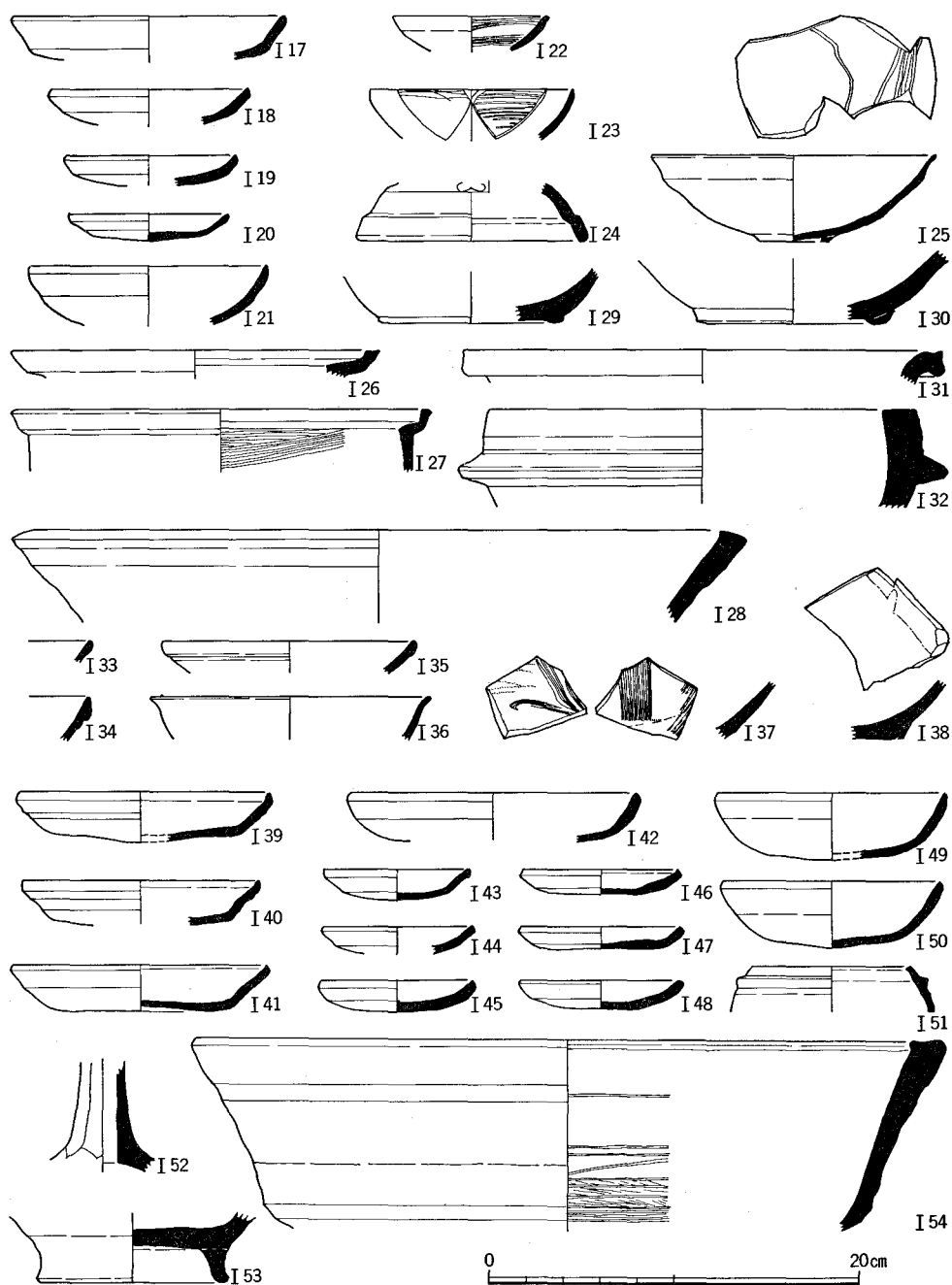


図8 SK 1 出土遺物(I 17～I 21土師器, I 22～I 28瓦器, I 29・I 36灰釉系陶器, I 30・I 31須恵器, I 32石鍋, I 33～I 35白磁, I 37青磁, I 38黄釉系陶器), SK 2 出土遺物(I 39～I 52土師器, I 53灰釉系陶器, I 54瓦器)

遺構と遺物

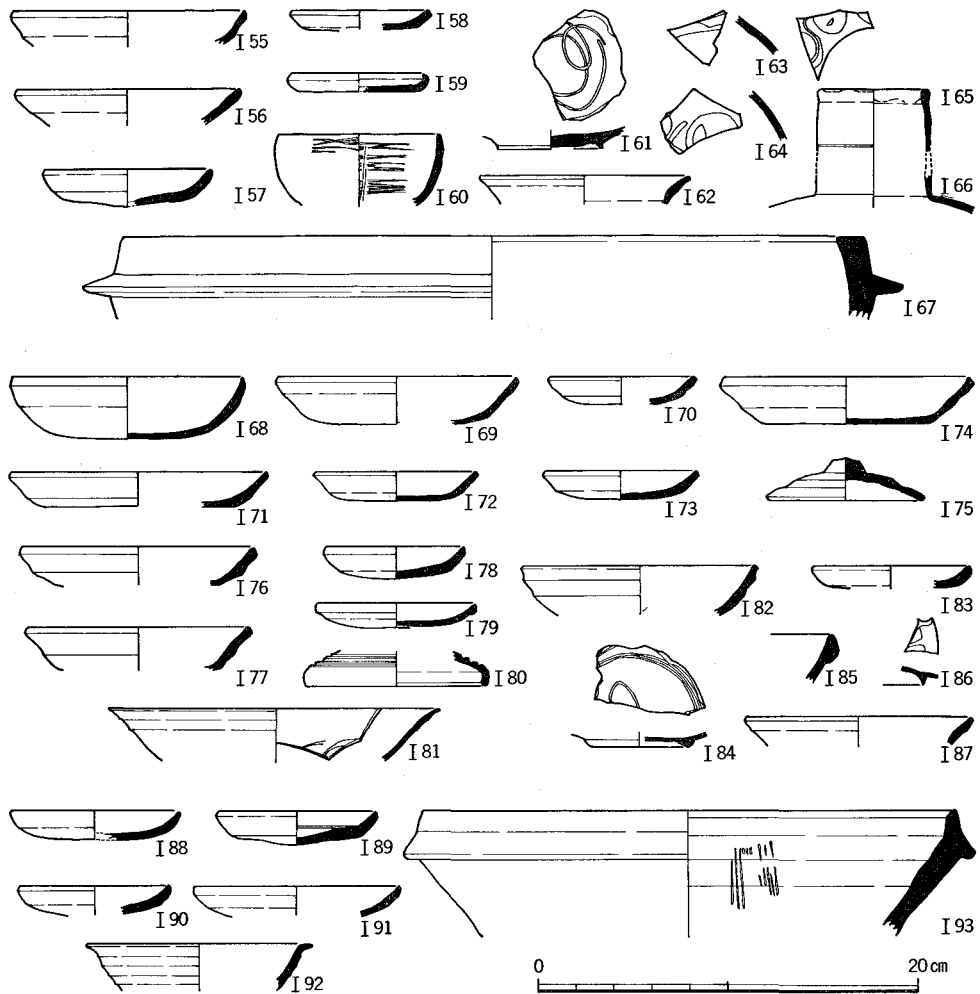


図9 SK10出土遺物(I 55～I 64・I 66・I 67), SK16出土遺物(I 68～I 70),
SK46出土遺物(I 71～I 73), SK51出土遺物(I 74・I 75),
SD1出土遺物(I 76～I 81), SD3出土遺物(I 65, I 82～I 87),
SB1出土遺物(I 88・I 89), SD4出土遺物(I 90～I 92), SK21出土遺物(I 93)

の遺構で、東西方向は3 mを検出した。SK2はSK1の西と南とにある掘形ともいえるべき遺構で、図4の斜線部Aより上を黒色土と黄褐色砂質土とを交互に搗き固め、上面を土手状の高まりに形成して、SK1の南西肩部を保護するように作っている(図版3-1)。また、図4の斜線部AとBからは各々6個体の土師器皿が完形で出土し、たんなる掘形の埋土の状態とは異なる(図版3-2)。濠か特殊な井戸の一部と思われる。

SK1からは土師器、瓦器など多くの種類の遺物が出土した(I 17～I 38)。このうち土

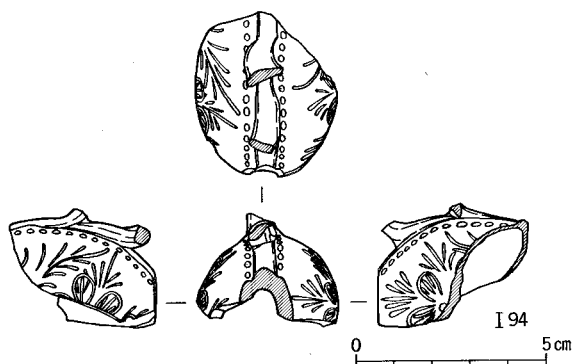


図10 S B 2-1 出土青白磁 縮尺1/2

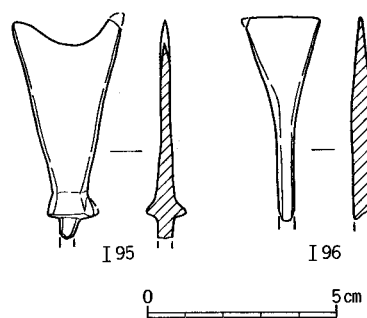


図11 S K 10出土鉄鏃 縮尺1/2

師器皿(I 17～I 21)は中世京都I期中段階ごろの特徴を示し、和泉型の瓦器碗(I 25)もそれと矛盾しない年代を示している。一方、S K 2出土遺物(I 39～I 54)は土師器皿(I 39～I 48)と同碗(I 49・I 50)が主体をなし、種類の変化は少ない(図版6)。土師器皿の口径は大型皿が14cm、小型皿9cmであって、口縁部は1段撫で面取り手法が主体をなし、それに灰白色の碗がともなう。これからみて中世京都I期中段階に属する。しかし、S K 1と比べて2段撫で手法の皿(I 39・I 40)の存在など古い様相をもっている。

第3期 調査区西北部で検出した集石を伴う土坑S K 21だけである(図5)。S K 21は南北が1.6m、深さ0.3mの土坑で、拳大の礫を充填している(図版4-2)。礫中に15世紀の備前焼すり鉢片(I 93)を含んであり、それより年代は下るものである。

4 軒瓦・平瓦・丸瓦

今回の調査では小片とはいえ比較的多くの瓦が出土した(図版6, 図12・13)。大部分は砂粒を多く含み、厚さは1.5cm前後の薄手で、凹面に糸切痕、布目圧痕、凸面に縄叩き痕を残すものである。軒瓦38点中18点はS K 10からの出土であり、軒瓦以外の瓦も半数近くがS K 10から出土した。軒丸瓦は21点で、文様は複弁12葉蓮華文1点(I 99)のほかは、すべて巴文である(I 97・I 98)。軒平瓦は17点で、文様は細片の唐草文1点、不明の1点を除き、すべて剣頭文であるが(I 100～I 102)、うち1点は外端に×字文を配する(I 100)。瓦当上面にはすべてに篋削りによる面取りがある。瓦当面に布目圧痕を残す折り曲げ造りによるものもある。篋記号を有する瓦片は、丸瓦14点、平瓦25点である(図13)。刻む部位は丸瓦では筒部凸面(I 105・I 106)、玉縁凸面(I 103・I 104・I 107)で、軒平瓦では凹面(I 108～I 110)、平瓦では端面(I 111・I 112)である。

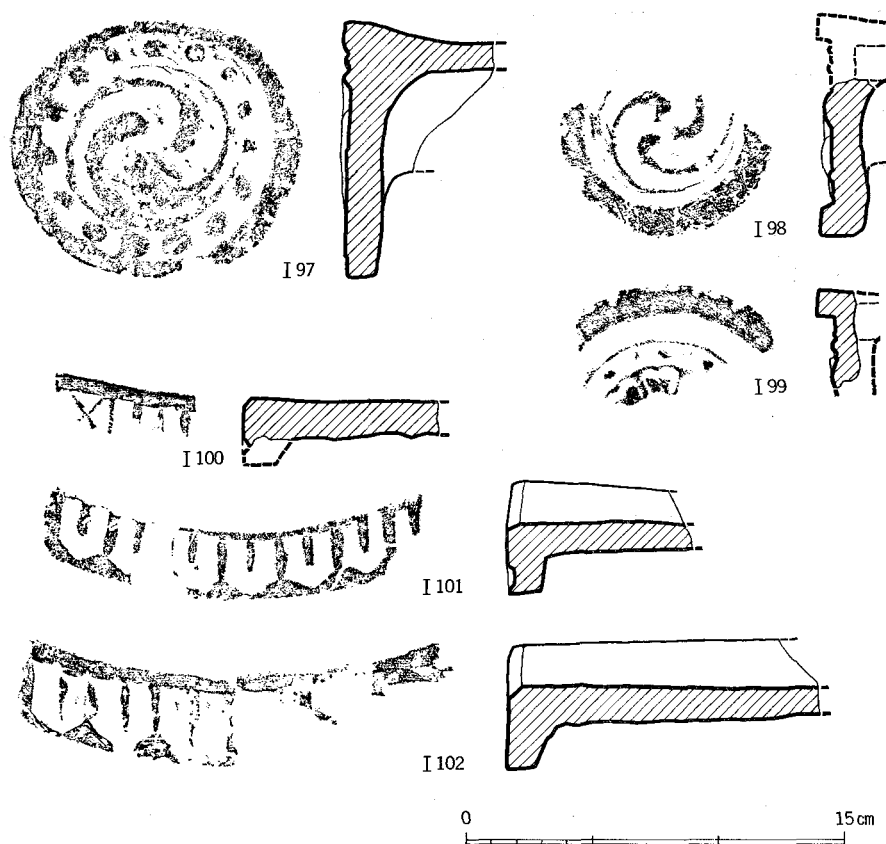


図12 軒瓦(I 97・I 98SK 10, I 99表土, I 100・I 101SK 11, I 102暗褐色土) 縮尺1/3

以上の瓦片は、瓦当の文様や製作技法、篋記号の位置などからみて上原真人のいう中央官衙系瓦屋第Ⅴ期の特徴を示し、12世紀後半から13世紀前半に比定できる〔上原78 a・b〕本調査区出土瓦の半数近くを占めるSK 10で共伴した土師器は13世紀中葉ごろとやや新しいが、瓦葺建物の存続期間を考慮すれば当然の帰結である。

5 小 結

今回の調査では、とくに第1・2期の遺構が重要である。第1期の遺構は墓と思われる方形土坑群とその北方の溝とからなる。本調査区西約100 mのAT 27区ではほぼ同時期の木棺墓とその墓域の西を画する溝とを検出している〔五十川81〕。両地点の溝は規模は異なるものの同じ正方位の溝であり、SD 1を墓域の北を区画する溝とすることも可能である。この溝より北側では方形土坑が検出された例は目下のところないのも傍証となろう。

第2期の遺構は建物と濠状遺構を中心とする。その性格は明らかでないが、猪頭骨の埋

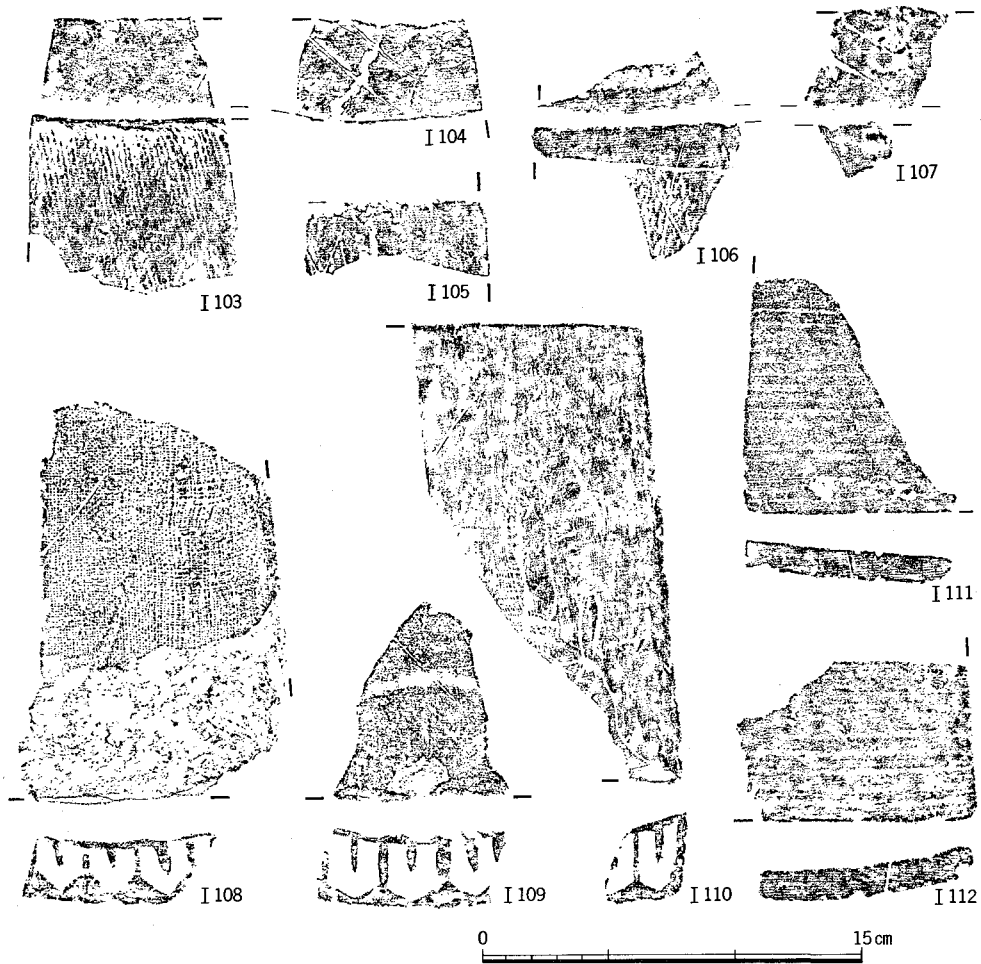


図13 篋記号のある瓦(I 103表土, I 104・I 108・I 109・I 111SK10, I 105SK14,
I 106SD4, I 107SD3, I 110SK1, I 112SK2) 縮尺1/3

納や、地鎮祭を想起させる建物内の土器埋納土坑の存在など〔水野84 pp. 1-12〕, この地のもつ特殊性を示しているものと思われ, 今後の調査への問題提起としたい。